

教育という名の投資を通じて アジアのリーダーを育成したい

機感を抱いている。そして、それぞれ小林さんの熱い思いに深く共感し、快くアドバイザーを引き受けてくれた。

将来を決めた留学経験

小林さんは、高校時代に日本経済団体連合会の奨学金を受けて、カナダの全寮制インターナショナルスクールに留学した経験を持つ。今回の学校設立に当たっては当時の教育に影響されるところが大きい。「生徒一人一人に合わせた時間割と得意科目をとことん伸ばす教育方針は、苦手科目の克服と受験勉強に焦点を当てる日本の学校教育とは根本的に違っていた」と言う。東京生まれの東京育ち。「日本では授業や友人関係で苦労したことなどなかった」と振り返るが、思い切つて留学した先では、英語が通じず、厳しい現実が待っていた。他方、各自が得意とする分野が将来どんな職業と結び付き、どういう人生につながるかを明確にイメージできる環境があった。10代の多感な時期に、さまざまな国籍の生徒と一緒に暮らし競い合つて学ぶ中、勉強に没頭でき、人生において大切なものを知る貴重な機会にもなった。

この経験が決め手となって国際協力に関心を持ち、帰国後に入学した大学では開発経済学のゼミに所属。卒業後は、外資系投資銀行に勤めた。また、友人らとともにベンチャー企業を立ち上げ、ビジネス界に飛び込み、「自らアイデアを出してどんな事業を形にしているベンチャーは面白い」と楽しんでいて、かねてからの夢であった途上国支援にかかわりたいと、国際協力銀行（現国際協力機構）へ転職。開発途上国のインフラ開発

に関する融資事業に携わり、大きなお金を扱う仕事にやりがいを感じた。他方、「学生時代から関心のあつた教育分野で国際協力をライフワークにしたい」という思いが募り、米国の大学院に留学。国際教育政策学の修士号を取得した。

フィリピンで見た現実

そして06年、念願だった国連児童基金（UNICEF）のジュニア・プロフェッショナル・オフィサー（JPO）としてフィリピン事務所へ赴任し、ストリートチルドレンの非公式教育に携わつた。「それまでアジアなどをバックパックでまわつ

たことはあつたが、現地でも生活するのはそのときが初めてだった」という小林さん。ゆつたりとした時間の流れや現地の人々と深く付き合つていく中で、フィリピンにますます愛着を持つようになる。

一方、この国の発展を拒む層の部分も垣間見た。「1回の国政選挙で1000人近くが死ぬような国。汚職がまん延していて大抵のことはお金で解決されてしまう社会があつた」とショックを受ける。フィリピン人の同僚の中にも、自国に見切りをつけて国外へ移住する者が後を断たない。「教育が普及すれば、人々は投票という行為を通じて社会を変えていける」という従来の信念が揺らぐのを感じた。

でも、そこであきらめないのが小林さん。「やる気や能力があつてもチャンスのない人が正當に評価される社会にしなければ」「広がり続ける貧富の格差を何とかしたい」。そんな思いから、これまで培ってきた、教育や経営の専門知識を生かして、社会を変えていけるリーダーを育成したいと考えた。

そうした中、現在共にプロジェクトを進める谷家衛氏に出会う。谷家氏は金利商品の相対価

値取引の第一人者と言われ、環境や地域開発分野でも積極的に投資を行う、あすかアセットマネジメントの代表取締役。フィリピンで見えてきたことを話すうちに、「じゃあそういう人をつくる学校をやるう」と盛り上がった。谷家氏は「日本には、もつとたくましく生きていける人材を育てる教育が必要」と考えており、その二つの目的を現実のものにするべく、学校設立計画がスタートした。

準備委員会のメンバーは、このほか建築家やメディア関係者企業の社長、インターナショナルスクールの元事務局局長など、幅広い分野の第一線で活躍する12人。すでに学校準備財団の設立と学校建設用地の取得、フアンドレイジングなどを進め、現在、カリキュラム内容を開発中。今後は、公益法人の認定手続きや海外提携校との交渉、教師陣のリクルートなど、やるべきことは山積みだが、「いずれは奨学金を出せるよう準備し、アジアを中心とした諸外国から幅広く優秀な生徒を集めたい」と語る。

持ち前のバイタリティーと周囲を元気にする明るい人柄で、夢を現実にする日は近い。